from London

ロンドン中心部を流れるテムズ川に架かるタワーブリッジ

イギリスの底力――日本文化受容の「広がり」と「深さ」

ある日の職場での昼食時、各自で思い思いのランチを購入して集まったところ、私以外の同僚全員がスシ、カツカレーといった日本食で、日本人の私一人がフィッシュ・アンド・チップスだったことに、全員が笑ってしまいました。日本食の人気は年々高まり、ヘルシー志向の人向けにスシ、ボリューム重視の人向けにカツカレーなどをイギリス人の嗜好（しこう）に合わせて提供するチェーン店がロンドン市内だけでも100店舗以上あります。味が「ブリティッシュ」な点を惜しむ声も在英日本人の中にはありますが、日本食はイギリスの物価水準を考えればお手頃な価格で、現地に根付いて見事に英国文化の一部となっています。

このような日本食人気が日本文化受容の「広がり」を示すものだとすれば、「深さ」を示しているのが、2019年5月～8月まで大英博物館で開催されていた日本のマンガの企画展でしょう。企画展の冒頭のインタビュー映像では、手塚治虫（てづかおさむ）が鳥獣戯画（ちょうじゅうぎが）（注1）にはじまる日本文化におけるマンガの伝統について

大英博物館正面にはマンガ展「Manga」の垂れ幕

今回のマンガ展に展示されていた「新富座妖怪引幕（しんとみざようかいひきまく）」。明治十三年（一八八〇）に仮名垣魯文の友人である河鍋暁斎（かわなべきょうさい）が描いた縦四メートル、横は一七メートル以上にもおよぶ大作。

語っていました。また、別の展示コーナーでは、仮名垣魯文（かながきろぶん）（注2）から現代の作家まで幅広く紹介されていました。このほか、コスプレやマンガなどの同人誌の即売会についても取り上げるなど、日本のマンガをさまざまな角度から、深く掘り下げた内容となっていました。この企画展に合わせて、大英博物館の学芸員による研究成果をまとめた350ページ以上もある本も出版されており、付け焼き刃的なものではないことが分かりました。また、大英博物館を舞台にしたマンガのグッズも販売するなど、この企画展は柔軟さとしたたかさを併せ持つイギリスらしさが存分に感じられるものとなっていました。このように外国という鏡に映る自国の姿から、その国の価値観を知るのも面白いものです。

（イングランド銀行、ロンドン）

＊本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。

（注1）鳥獣戯画：平安後期～鎌倉初期の時代に描かれた京都市高山寺所蔵の絵巻。サル・ウサギ・カエルなどの動物が擬人化して描かれ、日本最古の漫画といわれる。

（注2）仮名垣魯文：江戸末期～明治初期の戯作者・新聞記者。風刺のきいた戯文に長じた。『仮名読新聞』『魯文珍報』を創刊。著書に『安愚楽鍋』『西洋道中膝栗毛』など。